

# 修 士 学 位 論 文

## 地域で暮らす統合失調症を抱える人の 就労に対する意識

（西暦） 2017 年 7 月 7 日 提出

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻

看護科学域

学修番号： 15894610

氏 名： 長谷川 聖奈

（ 指導教員名： 廣川 聖子 准教授 ）

## 要旨

本研究は、地域で両親と共に生活をしている青年期から壮年期の統合失調症を抱える人の就労に対する意識を明らかにすることを目的として、都内の精神保健福祉関連施設に通所している6名(男性5名、女性1名)を対象に「自分が働くことについてどのように考えているか」についてインタビュー調査を実施した。

その結果、8つのカテゴリーが抽出された。【就労することを考える動機に関する意識】があることで【就労することに前向きな意向を持っている】や【就労することに自信がある】といった就労に対する前向きな意識を抱いている。一方で【就労することに積極的ではない】や【就労を目指す時期が漠然としている】といった就労に対する消極的な意識も抱いており、双方の間に【就労することに自信が持てない】、【自分が就労する姿が想像できない】、【自身の就労に関わる他者への期待】といった意識があり、就労に向けて行動に移すことを阻害していた。

キーワード：就労 統合失調症 意識 青年期 壮年期

## Abstract

The current study aimed to reveal the consciousness about employment of people who is suffering from schizophrenia, aged between adolescence and middle adulthood period in which people living with their parents in their community. Study design was qualitative descriptive design. We conducted 6 semi-structured interviews (5 men and 1 female). Participants are asked "How do you think about working?" at Mental health facilities in Tokyo. As a result, following 8 categories were generated. 【awareness related to motivation for employment】 【having positive intention for employment】 【being proud of getting a job】 【negative attitude for employment】 【job hunting schedule are vague】 【no confidence to be employed】 【Poor self-image against working】 【expectation for others who care about patient's employment】 .

Key Words :

Schizophrenia, employment, Adolescent, "Middle adulthood", consciousness

## 目次

I.	はじめに	
1.	研究の背景	2
2.	用語の定義	3
3.	研究の目的	3
4.	研究の意義	3
II.	研究方法	
1.	研究デザイン	3
2.	研究対象	3
3.	データ収集方法	
1)	調査期間	4
2)	研究対象者の募集方法	4
3)	データ収集場所	4
4)	データ収集方法	4
5)	インタビュー内容	4
4.	データ分析	4
5.	倫理的配慮	4
III.	結果	
1.	対象者属性	4
2.	対象者概要	5
3.	就労に対する意識に関する分析	8
IV.	考察	
1.	就労に向けて行動に移すことを阻害する意識	
1)	就労に向けて行動に移すことを阻害する意識が生じる理由	14
2)	周囲の人から受ける影響	15
2.	自身の生活に対する焦りのなさ	16
3.	就労移行促進に向けた効果的な支援への示唆	16
V.	結論	17
	謝辞	17
	文献	18
	資料	18

## I. はじめに

### 1. 研究の背景

精神障害者に対する支援の在り方は近年大きく変遷している。かつては入院中心の医療提供であったが、平成5年改定の「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」に“障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律と相まってその社会復帰の促進及びその自立と社会経済活動への参加の促進のために必要な援助を行う”と明記されたことを皮切りに、地域におけるケアが中心の医療提供へと変わってきている。平成16年「精神保健医療福祉の改革ビジョン」により“入院医療中心から地域生活中心へ”という基本方針が示され、平成18年に施行された「障害者自立支援法」（現「障害者総合支援法」）に精神障害者が含まれたことと相まって、精神障害を抱える人々が地域で自立した生活をしていくためのサポート体制の強化が進められている。

精神障害者が地域で自立した生活を送り社会参加をしていくにあたり、大きな課題の1つとして挙げられるのが、経済的な自立である。精神障害者によって収入の得方はそれぞれであり、生活保護の受給や障害者年金、就労による収入などが挙げられるが、いずれの方法であっても精神障害者の収入は多いとは言えず、特に就労における賃金は低いことが大半である。「障害者雇用実態調査結果」（厚生労働省、2009）によると、精神障害者の1か月の平均賃金は、15万9千円（超過勤務手当を除く所定内給与額は15万4千円）となっているが、週所定労働時間別にみると通常（30時間以上）の者が19万6千円であるのに対し、20時間以上30時間未満の者が8万3千円、20時間未満の者が4万7千円となっており、就労可能な時間による差が大きい。山根、中川、草地、磯村、赤瀬（2014）によると、精神障害者の場合、疾患や障害特性の理解が難しいことや社会的偏見などから一般就労が難しい現状となっている。また、厚生労働省の「障害者の就労支援対策の現状と課題」によると、就労系障害福祉サービスから一般企業への就職へ繋がった割合は4.1%（2015年度）であり、ほとんどの利用者が一般就労へ繋がっていないと言える。

一方、「東京都福祉保健基礎調査」（東京都福祉保健局、2013）の「障害者の生活調査」によると、誰と一緒に生活しているかという項目に対する回答で最も多かったのは「一人暮らし」の37.7%であり、年齢別の内訳で見ると29歳以下の一人暮らしの割合は15%と少ないが年齢が上がるにつれ増加し、40歳代では33.1%、60歳以上では56.3%に達している。早野（2005）によると、現在は両親と同居している人が、両親がいなくなった時に経済生活をどのように維持していくのが課題となる人は多いと考えられている。よって、一人暮らしで生活をしていく上で収入を精神障害者自身が得ることは重要であり、収入の有無や額に関する悩みを切り離すことはできないと推察できる。

精神障害者の就労希望に関して、「精神保健福祉基礎調査」（名古屋健康福祉局、2003）では、現在就労をしていない人のうち、入院者では就労希望者が多い（59.5%）のに対し、地域に戻った通院者は就労を希望しない者（47.8%）が希望する者（41.7%）を上回っている。また、入院者、通院者どちらも年齢が上がるにつれて就労希望が減る傾向にある。自立した生活や社会参加を目指すために退院し地域での生活に戻り、デイケアや通所施設において就労を目指すプログラムへ参加したことが心身面に影響をあたえ、就労への意欲を失わせてしまっている可能性も考えられる。また、外来の精神障害者の精神科初診時の

年齢を見ると、20歳未満が41.0%を占め、40歳以上は20.1%となっている。疾患別に見ると統合失調症は20歳未満が56.2%を占めるのに対し40歳以上は6.2%に過ぎないことから、在学中の発病が多く就職経験もなく社会生活への適応に困難を有する者も多いことが伺われる（内閣府，2011）。青年期や壮年期ではまだ就労の機会が多いのに対して、年齢が上がるにつれて就労が困難になる。青年期はまだ一人暮らしの割合が多いとは言えない世代であるが、この先歳を重ねるにつれ保護者との死別等により一人暮らしすることを余儀なくされることが大いに考えられる。そのような状況で就労することを考えた際に、青年期や壮年期での就労経験の有無は就労のしやすさに大きく影響すると考えられる。

以上の点から、若年層の精神障害者の就労に対する意識や取り組みは、当事者の将来の社会生活に関わりが深いと言え、そういった世代に対する就労支援の体制強化は精神障害者の社会参加の促進に繋がると考えられる。より良い就労支援体制を構築するにあたり、まずは精神疾患を有する当事者の意識を明らかにすることが必要であると言える。特に若年層での発症が多い統合失調症に焦点を当てることで、当事者の意識や問題点が明確になると考え、地域で生活する青年期から壮年期の統合失調症を有する人の就労に関する意識を明らかにすることを目的とした。

## 2. 用語の定義

- ・就労…「障害者総合支援法」における就労系障害福祉サービスの事業概要に基づき、雇用契約に基づいた就労（就労継続支援A型事業以上）とする。
- ・就労に対する意識…本研究においては、「自身が就労することについてどのように考えているか」とする。

## 3. 研究の目的

地域で保護者から何らかの援助を受けながら生活をしている青年期から壮年期の統合失調症を抱える人の就労に対する意識を明らかにすることを目的とする。

## 4. 研究の意義

本研究の結果により、地域で生活する青年期から壮年期の統合失調症を抱える人が就労に関して考えていることが明らかとなり、彼らに対する支援の見直しや発展に繋がることが期待される。

# II. 研究方法

## 1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

## 2. 研究対象

研究対象者は、東京都内の精神保健福祉関連施設に通所しており地域で保護者から何らかの援助を受けながら生活をしている青年期から壮年期の統合失調症を抱える人とした。

### 3. データ収集方法

#### 1) 調査期間

2016年9月から11月

#### 2) 研究対象者の募集方法

施設長の下承を得た後、施設内にポスターを掲示し研究対象者を募集した。ポスターで研究対象者が集まらない場合は、研究代表者が直接施設へ出向き、研究対象候補者に研究の主旨を直接説明させていただく機会を設けた。

#### 3) データ収集場所

インタビューは対象施設内にあるプライバシーや個人情報を守れる個室を利用した。

#### 4) データ収集方法

研究の説明を行い同意が得られた上でインタビューを行った。インタビューの冒頭に対象者にフェイスシート（表1）を記入してもらい、フェイスシートの情報及びインタビューガイド（表2）を用いて半構造化インタビューを行った。インタビューは「自分が働くことについてあなたはどのように考えているか」に沿って実施した。インタビュー調査実施時は研究対象者の同意を得た上でICレコーダーにて録音をした。

### 4. データ分析

データ収集後、インタビュー内容を逐語録に起こした。逐語録から「就労に対する意識」について述べられている文脈を抽出し、コード化を行った後に共通要素をまとめて抽象度を上げ、サブカテゴリー化とカテゴリー化を行った。

### 5. 倫理的配慮

研究同意が得られた場合でも、いかなる時点においても研究協力を拒否することは可能であり、拒否したことによる不利益は一切生じないことを研究協力施設施設長及び研究対象者に文書及び口頭にて説明を行い、書面にて同意を得た。

本研究は平成28年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得た上で実施した。（承認番号16027）

## III. 結果

### 1. 対象者属性

対象者は東京都内の精神保健福祉関連施設に通所しながら地域で生活している、青年期から壮年期の統合失調症を抱える6名（男性5名、女性1名）であった。利用施設毎の対象者数は施設地域生活支援センター（以下、施設Aとする）が3名、就労継続支援B型支援事業施設（以下、施設Bとする）が2名、生活訓練（以下、施設Cとする）が1名であった。対象者の基本属性に関しては（表3）に示した。

### 2. 対象者概要

#### 1) A氏

40 歳代、男性。統合失調症の診断年齢は 30 歳代前半。両親と同居している。高校生の頃に発病し、当時の診断名はノイローゼだった。

20 歳代後半の時、30 歳を前に仕事を何もしていないとその後もうずっと仕事ができないと周囲から言われたことをきっかけにアルバイトを始めた。アルバイトは肉体的にも精神的にも辛く、元々あった自暴自棄がさらに強くなっていった。自暴自棄だったことや周りに良い顔をしたかったこと、さらに当時交際していた女性の影響を受けて薬を飲むことをやめてしまったことから症状が悪化し、アルバイトに行かなくなりそのまま辞めることになった。

アルバイトを辞めてからは、以前通所していた地域活動支援センターに再び通所しており、5 年前からは施設 A が運営するレストランにスタッフとして参加している。

「経済的自立より精神的自立を先にするべき」と両親から言われ、A 氏もその考えを理解していることから自身が就労することについて気にはしているが、それよりもまずは精神的自立をすることが必要だと考えている。ゆくゆくは障害者雇用等で働けるようになれば良いと思っているが、それよりも現在の施設に継続して参加することの方が大事だと思っている。自分に自信を持つことができず働くことを半ば諦めており、就労支援施設等へ行くレベルにもまだ達していないと思っている。働くことを焦りたくないとも思っており、現実としては今の生活を維持したいと思っている。

## 2) B 氏

20 歳代、女性。統合失調症の診断年齢は 10 歳代前半。両親と同居している。就労経験はない。現在は、障害者年金を受給しており、生活費は両親が全て賄っている。

退院後から、生活リズムを整えるために自宅近くのデイケアに通所を開始した。デイケアの近くにある施設 A が運営するレストランへ行く機会が何度かあり、そこで働く人たちが楽しそうに見えたことから施設 A に興味を持ち、2 年半ほど前からデイケアと施設 A の 2 施設を利用している。

発症後から 20 歳頃まで調子が悪かったこと、両親から働かなくて良いと言われたこと等から、今まで働くことを考えたことがない。電車に乗って通勤してみたいという憧れや成人しているということを理由に働いてみたいとは思っているが、具体性はなく、就労に向けた取り組みも一切していない。興味があった施設 A のレストランへの参加も、まだ自信がなく先に進んでいない。

また、障害者年金を受給していることや作業による工賃を貯金していることから、両親が亡くなって一人になった際でもある程度生活はできると思っている。

## 3) C 氏

30 歳代、男性。統合失調症の診断年齢は 20 歳代後半。持ち家で一人暮らしをしている。

学生時代にアルバイトをしていた職場で社員登用をされ、3 年間正社員として働いた。



高校生の頃から「自分とは何か」、「他者とは何か」とずっと考えている。周囲の人が目指すような結婚や出世などに一切興味を持たず、大学生の頃は周囲の流れに乗って就活をしたがすぐに就活をやめてしまった。

30歳目前になっても周囲の人が目指すような生活に興味を持つことができず、周囲の人と自分を比べて「人生これで良いのか」、「自分は社会不適合者だ」等と考えるようになり、思いつめて1年間引きこもっていた。母親に連れられ精神科病院へ行き、入院となったことで症状が明らかとなった。

約7年前から施設Aを利用している。数年前に再び働くことを考え、施設A内の他利用者からの紹介で就労移行支援施設に通い始めた。実際に仕事を行ってみて、スタッフからはいつでも就職できると言われ、自身でも仕事はできると思ったが、他の利用者の就労に対する気概に負けていると感じたことや就労移行支援事業の利用可能期間である2年の間に就職等の次のステップを決めなければならないことに疑問を感じ、就労移行支援を10か月で辞めた。現在は、就労継続支援B型支援事業施設と施設Aを併用している。

現在も、仕事はできると自分でも思うが周囲の人と比べて意欲がないと感じていることから自信が持てず、できるはずの仕事をずっと遂行していくことができないと思っている。意欲が湧いてきたら就労等の次の道に進もうと考えている。友人の影響もあり、現在は焦って働くよりも自分らしく生きることを大切にしようと思うようになった。働くことの楽しさや大切さは理解しており、働くことでしか得られない喜びもあると思っている。

亡くなった叔母の遺産により持ち家に一人暮らししているが、近くに住む母親や姉から資金や生活面での援助を受けている。金銭面において現在も生活はギリギリと発言はしているが、焦りはなく今後も生活をするお金はあると考えている。

自身の就労移行支援での経験を踏まえて、就労移行や障害者雇用に進む前にもう一段階レベルを下げた支援があれば良いと思うようになった。

#### 4) D氏

30歳代、男性。統合失調症の診断年齢は10歳代。グループホームでの生活を経た後に一人暮らしを始め、現在9か月が経過した。就労経験はない。

障害者年金と生活保護を受給して生活をしている。近くに住む両親から金銭面や生活全般の援助を受けている。

現在は就労継続支援B型事業施設と施設Aを併用している。

一人暮らしを始める際に生活保護の受給の話が持ち上がり、一人暮らし開始3か月後から受給が始まっている。生活保護を受給するようになり、一生生活保護には頼りたくないと感じ就労することに関心を持った。現在は「家賃ぐらいいは自分で稼ぎたい」と思っている。

周囲の人たちからのアドバイスにより、早くて1年後くらいから就労移行支援に行き、2年間の支援を受けた後に就労をしたいと発言する一方で「まだ何も決めていない」とも発言しており、本人の中で明確な時期はない。

また、友人の体験話を聞き働くことのイメージについて週5日通うことや就労開始当初は1日4時間の勤務などと語っているが、仕事の中身等については何も考えていない。



#### 5) E 氏

50 歳代、男性。統合失調症の診断年齢は 10 歳代前半。両親と同居している。現在の母親は父親の後妻であり、血縁関係はない。

現在は障害者年金と施設 B の作業の工賃の一部を家に入れているが、基本的な生活費は両親が賄っている。

中学校卒業後から父親が営む家業を手伝っていた。20 歳代前半に入院し、退院後に父親の知人の元で 1 年間生活し知人の仕事を手伝った。実家に戻ってからは再び家業を手伝っていたが、仕事における義兄との人間関係や両親への気まずさから引きこもることが何度かあった。40 歳代前半に 8 年間引きこもり、食事が満足に取れなくなったことなどから半年間の入院となった。入院中に父親が実家の近くの作業所を探し、退院後から現在の施設 B に通所している。

両親が高齢であることや両親からの意見により、そろそろ就職をしてみたいと考えている。実家で働き続けるよりは他の場所で就職をしたいと思っている。就労形態にあまりこだわりはなく、一般就労と就労継続支援 A 型事業の両方を視野に入れている。以前施設のスタッフからの紹介で就労継続支援 A 型事業施設の見学に行ったが、環境等を理由に利用には至らなかった。また、仕事に対する不安等から就労へ踏み出す勇気が出ないでいるため、2、3 年のうちに働きたいと発言する一方で、両親がまだ元気であることを理由に就労に向けて取り組むことを先延ばしにするような発言や、生活保護を受給したくないから働きたいがどうしてもなら生活保護受給も仕方ない、等の両価性のある発言が多い。

現在は、施設スタッフから勧められた就労継続支援 A 型事業における早朝の清掃業務を行った後に施設 B への通所をするという生活を視野に入れて、就職先を探そうと考えている。

#### 6) F 氏

30 歳代、男性。統合失調症の診断年齢は 20 歳代前半。両親、弟と同居している。10 歳代後半で発病し、当時の診断名は神経過敏だった。

10 歳代後半から様々なアルバイトを経験しており、正社員としての就労経験も数年ある。10 歳代前半から麻薬を使用しており、20 歳代前半の時に逮捕された。逮捕を機に自分のそれまでの行動を反省し、出所後は心を入れ替えて生活することに努めアルバイトに打ち込んだ。約 1 年でチーフにもなったが、勤務時間の長さやプライベートの忙しさにより躁状態のようになり、再び体調を崩し入院した。その際に、診断名が統合失調症となった。

退院後、本人はすぐに働くつもりでいたが、両親に働くことを止められた。退院の 10 年後に両親から働く許可があり、すぐにアルバイトや一般就労を探したが、10 年以上のブランクがあることや精神疾患を有することから思うように仕事は決まらなかった。そんな折に母親から作業所への通所を提案され、初めは行く気が起きなかったが見学に行きスタッフと話をしたことで就労支援事業施設への通所を決め、現在は生活訓練に通っている。

現在も就労することに意欲的であり、将来アルバイト等でレギュラーワーカーになることを目標としている。一般就職もできたら良いと思っているが、就職は希望のようなものであり、手が届かないと感じている。アルバイトに関しても、精神障害を抱える人が再び働くことの難しさを感じており、焦らずに10年ほどの長い時間をかけて就労を目指していこうと考えている。

就労する目的として金銭を稼ぐことを重要視している様子であるが、両親が亡くなった後も食費以外のすべての生活費を両親の遺産で賄うつもりでいると語るなど、生活にかかるお金に関して理解が不足している。

両親に働くことを止められていた10年間に自身が働くことについて常に考えており、10年間に考えた働くことへのこだわりが現在の施設での参加の仕方や今後の就労に対する意識に大きく影響を与えていると感じている。

### 3. 就労に対する意識に関する分析

地域で生活する統合失調症を抱える人が抱く就労に対する意識に関して、91のコードが抽出された。91のコードから30のサブカテゴリーが抽出され、更に8つのカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉で表し、対象者の語りは「斜体」で示す。カテゴリー、サブカテゴリー、コードを一覧にまとめたものを(表4)に示す。

#### 【就労することを考える動機に関する意識】

【就労することを考える動機に関する意識】は、〈生活保護を受けたくないから就労を目指す〉、〈両親が健在のうちに就労をしたい〉、〈周囲の人に影響されたことで就労に関心を持っている〉、〈働くことは好き〉の4つのサブカテゴリーから構成された。

対象者にとって生活保護を受給か否かということは大きな問題であり、〈生活保護を受けたくないから就労を目指す〉という動機としての意識が語られた。生活保護の受給が始まったことで就労していない自分に直面することになり、就労することに意識が向いたり、生活保護を受けたくないから就労を目指したいと感じていた。

「…やっぱり一人暮らしなんでー、ちょっと生活費ぐらいい、ちょっと自分でー、(中略) まあ、あ、別に、い、一生生保に頼りたくないんでー、」(D氏)

「それ〔自分で働けるようにしておくこと〕はしなくちゃいけないなって。生活保護は受けたくないからー。うん、まあどこまでできるかわかんないけども。うん。」(E氏)

また、保護者の元で何らかの生活援助を受けている人を研究対象としたことから、特に両親についての語りも多く、その中から〈両親が健在のうちに就労をしたい〉という意識が見られた。両親が亡くなった後の自身の生活について少なからず心配していた。また、就労をする時期については未定であるが両親の年齢が気がかりであったり、両親が亡くなった後の自身の生活について考えをめぐらせ両親が健在のうちに就職をしたいと考えていた。

「うん、何かー、まあー、自分ら〔両親〕も、もう 80 過ぎてるんでー、もういつどうなるかわかんないっつーんでー、その前に、どっか就職してー、うーん、一般で、もう何でも、A 型でも何でもいいから、自立できるように、したい、ですね。」(E 氏)

「何年以内っていうのはないけど、…うーん、今もう親父たちが 82、83 なんで、…うーん、90 まで生きてるのかな？生きてるのかわかんないですね。さらっと逝っちゃったりね。突然とかね。まあ近いうちって感じですかね。」(E 氏)

「うん親のお金、はアテにしていっていか、自分で、その、食費を稼ぐつもりはあるっていか、うーん、まあ、仕事から逃げてないっていか、何かもう、信じられないことがあって、親の金がなくなった時に、生活保護を、使って、生きるか、その時自分が何か奇跡的に就職して、まあ、お父さんとお母さんが後 20 年後生きた時に、就職して、20…5 万円ぐらい稼いでいれば、生活保護を受ける必要はないし、まあ色々な、こう可能性は、考えていますよってこと、」(F 氏)

#### 【就労することに前向きな意向を持っている】

【就労することに前向きな意向を持っている】は、〈自分ができると思うタイミングで就労をしたい〉、〈生活する上で働くことは大切である〉、〈就労することについて目標や希望がある〉、〈元気なうちは働かなければならない〉、〈働かない時期に考えた思いを抱き続けている〉、〈自分のためになるから働きたい〉の 6 つのサブカテゴリから構成された。

各対象者が就労したいと考えており〈自分ができると思うタイミングで就労をしたい〉という意識が見られた。時期に関しては各対象者様々であり、近いうちに就労をしたいと考えている対象者や就労移行支援を終えてから働きたいと考えている対象者がいることがわかった。

「で 2 年、〔就労移行支援が〕満期になってー卒業した後、そっちのほうこ、働きたいなと思って。」(D 氏)

「まあつ、うん。もうそろそろ就職も始めて、みたいとは思ってるんですけど。」(E 氏)

就労したい思いについては、多くの対象者から〈就労することについて目標や希望がある〉ことが語られていた。一般就労や就労継続支援 A 型事業に行くことを目標として体験等に行っている対象者や、まずは就労移行支援に行きたいと考えている対象者が見られた。施設での経験等から職種について希望を持つ対象者も見られた。また、過去に就労経験がある対象者は以前働いていたように再び働きたいと考えていた。

「そうするとだからしゅう、しゅう、就労のこと〔就労に向けた取り組み〕は、やってみたいですけど…」(D 氏)

「…何回か、何回かっていうかこないだ、あの一、T の方で、体験、見学に行って、体験を少し、してきたんですけどー、んー、A 型の。行ってきたんですけど(笑い)やっぱりちょっと合わないかなーと思って止めにしたんですけど。今探してます。色々。」(E 氏)

「あの一、就労支援に行って一、パソコン、を、こう、1年か2年やって一、あの一、そういう手もあるんですけど一、まあ字も綺麗じゃないし（笑い）だから、できないかな一って思って、それより、まあ、軽作業みたいなのがいいかな一とは思いますが。」（E氏）

「だからまあ一、ほんと一、ほんとに一、元に戻って一、あの、フリーアルバイターとかで、レギュラーワーカーになるとか夢はある伝えてはあるんですが、」（F氏）

就労することを考える理由の一つとして〈自分のためになるから働きたい〉という意識があった。過去に就労経験がある対象者は就労時の働く楽しさを覚えており、働くことで働く喜びを得たいと感じていた。また、就労で得る収入で自分の趣味に取り組むことができるようになると考えている対象者もいた。

「収入ももちろんそうですけど一、…働くことによって得る労働の喜び？〔を得たい〕（中略）うーん、そう…かな…働くことによってしか、得られない喜びってあると思うんですよ」（C氏）

「うーん、それは楽しみのためでもあるし一、（中略）うーん、〔趣味をやるために〕も、うんまあ、稼ぎたいと思ってます。」（E氏）

#### 【就労を目指す時期が漠然としている】

【就労を目指す時期が漠然としている】は、〈現在は就労することを焦っていない〉、〈もし機会があれば働いてみても良いかなと思う〉、〈就労に向けて何も動かないことは不安〉、〈今はまだ行動に移していないが働く気はある〉、〈就労を目指す時期は漠然としている〉の5つのサブカテゴリーから構成された。

就労をしたいと発言をする一方で、〈現在は就労することを焦っていない〉という意識も見られた。将来的には就労をしなければと感じてはいるが今はまだ生活に困っていないことや両親が健在であることから就労することを焦っていない。また、就労するよりも自分らしく生きることを大事にしたいと考えていることが就労することの優先度を下げていることがわかった。

「でも、その〔働くことの大切さや楽しさを理解する〕一方で、ようやく今の自分を受け入れられるようになったというか、自分とは何か、とか、そういう答えが、見つかったというか、それを、あるがままの自分を受け入れる、今、の自分ができることとは何か、とか、」（C氏）

「ギリギリだな一って感じですね。だから…まあ〔働くことを〕焦ってないのかもしれないですけど。」（C氏）

「うん。まだ、〔両親が〕元気なんで〔焦っていない〕。それで病気でもされたら入院でもされたらもう、もう、大変だが。」（E氏）

就労を目指す時期に関しても、〈就労を目指す時期は漠然としている〉という意識がみられた。就労を目指すための就労移行支援等への移行や就労することを前向きに考えてはいるが、その時期は自分の中では明確になっておらず、周囲の人の意見に左右されがちである。両親の有無等自分が置かれる状況を考えて就労をしなければという思いはあるがそれが自分の中で時期を考えることには繋がっていない。

「いや、もうちょっと前から〔就労移行支援に行く〕話はしてますよ、スタッフさんと。まああと1年後ぐらい、だと思います。医者でもまあ、通院先ではありますけど、〔1年後ぐらいと言われた〕」(D氏)

「何年以内っていうのはないけど、…うーん、今もう親父たちが82、83なんで、…うーん、90まで生きてるのかな？(笑い) (中略) まあ近いうちって感じですかね。うーん、3年ぐらい？3年だったらまだ良いんだけど(笑い) まだまだ、5か6年ぐらいかな(笑い)」(E氏)

#### 【就労することに積極的ではない】

【就労することに積極的ではない】は、〈現在は就労に向けて活動する気はない〉、〈就労することに積極的ではない〉、〈生活状況によっては就労ではなく生活保護受給も一つの方法だと思う〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

就労をしたいとは思っているが、現在は就労することよりも現在通所している施設での生活を優先したいと感じていたり、就労したいという気持ちが就労につながる施設へ移行する等の意欲にまでは繋がらなかったりすることから、〈現在は就労に向けて活動する気はない〉という意識が見られた。

「〔働くということに対して〕あんまり積極的じゃ(笑い)ないと思います。」(B氏)

「うーん、まあ〔働くよりも〕〇〇でいいかなと思って。それは一、働けるようになって、週2で働けるようになって、まあ、ぼく、定年くらいまではたらはたら働いて、働けたら一、そりゃいいなと思うんですけど、まあ〇〇でちゃんと、でいいなって感じですよそれよりも。」(A氏)

就労に向けた施設へ通所をしてみても他のメンバーと比べると自分自身は就労することへの熱意が弱いと感じていたり、自身でも働きたいと思うが今は働くことに積極的ではないと感じていることから、〈就労することに積極的ではない〉という意識があることがわかった。

「〔働くということに対して〕あんまり積極的じゃ(笑い)ないと思います。」(B氏)

「あの、年金とかもらっててお金とか困ってないので一、まああんまり働く必要もないのかなーっていう。貯金もあるのであんまりお金に困ってないので一、」(B氏)

#### 【就労することに自信が持てない】

【就労することに自信が持てない】は、〈就労することに自信が持てず先に進めない〉、〈就労による心身面への影響に不安がある〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

自身が就労することを考えた際に、〈就労することに自信が持てず先に進めない〉という意識が見られた。就労経験がない対象者は仕事に対して責任を持つ自信がなかったり就労をしても仕事ができるかがわからないために就労に向けて踏み出すことができない。また、就労経験がある対象者も与えられた仕事を全うできるか不安に感じることで就労に踏



み出すことを難しくしている。施設等の作業で仕事ができると感じていても、それをずっと遂行することはできないと思っていることも就労に向けて動くことを躊躇させていると言える。

「なんか、まだ…そこまで自信がないというか、（中略）なんか…大変そうだなあって（笑い）思って、なかなか…〔作業に参加できない〕」（B氏）

「まあ仕事したこ、まともにしゅうしたこ就職したことないんでー、長続きするかなーっていう不安はありますけどね（笑い）」（D氏）

「やっぱり仕事が、出来るかどうかってこと〔が不安〕ですね。あ、い、与えられた仕事が、ちゃんとできるようになれるかな、とかできるかな、とかもあるし。あと…あ、足を引っ張らない、というか…周りを…」（A氏）

「今は…自信がないですねやはり。自分に自信が持てないって言ったほうがいいですかね、ごめんなさい、自分に自信が持てない。…多分仕事はできると思うんです。はい。できることはあると思うんです。うん。ただそれ〔できること〕を…ずっと遂行していく自信がない（笑い）」（C氏）

#### 【就労することに自信がある】

【就労することに自信がある】は、〈就労による心身面への影響はないと思っている〉、〈働くことや自分の生活に不安はない〉、〈施設の作業で仕事はできると感じている〉3つのサブカテゴリーから構成された。

現在の施設で作業等に取り組んだ経験から体力面に問題はないと感じていたり精神症状に変化が見られないことから、〈就労による心身面への影響はないと思っている〉という意識が見られた。

「まあそうですね、今、週5日通ってまして、体力的には問題ないと思ってて（笑い）」（D氏）

「〔精神症状は変わらず〕なんとかやれると思います。はい、仕事が変わっても。」（E氏）

また、過去に就労経験がある対象者の中には作業等の参加により仕事自体はできると感じている人もおり、〈施設の作業で仕事はできると感じている〉という意識が見られた。

「〔就労移行支援を〕やってみてー、できるなとは思ったんですね。とは思ったし、スタッフさんにも、まあ別にまあ、いつでも…就職できますって言われて、」（C氏）

「まあここ〔現施設〕に来てー、思ったのは、ああ、やっぱり〔仕事は〕できるんだって思ったの。」（F氏）

#### 【自身の就労に関わる他者への期待】

【自身の就労に関わる他者への期待】は〈就労する上では人間関係が大事〉、〈周囲の支援次第では就労に挑戦できると思う〉、〈病気を理解してもらえる場所で働きたい〉の3つのサブカテゴリーから構成された。



過去に就労経験のある対象者から〈就労する上では人間関係が大事〉という意識が見られた。就労経験において人間関係に悩んだ経験があり、次に就労をする場合は人間関係を重視して選びたいと感じている。

「うーん、不安…うーん……やっぱり人間関係が良くないと、うまくいかないですよ。〔希望する人間関係は〕どういう人間関係…うん…信頼されてる関係、とか…うんー。まあ、あの、職員とか、こう、上司とか？そういう感じですかね。あとは周りの人たちと、こう、上手くこう、ね、うん、話できたりとか。うんー。」(E氏)

また、現行の支援よりももっと手助けの厚い支援が欲しいと望んでいたり周囲の人が応援をしてくれることで就労に向けて勇気を出すことができると考えたりしていることから、〈周囲の支え次第では就労に挑戦できると思う〉という意識も見られた。

「なんか、就労移行とか、障害者雇用とか、の前に、ワンステップ、踏める、ような、とりあえず雇用じゃないですけどー、なんか…働くということを考えながらー、働きながら、どうしていけばいいのかなっていうのを考えられるような、そういう、施設なり制度があってもいいのかなとは思うようになりました。」(C氏)

「どうなんですかねえ…やっぱりいっぱい、応援してくれる方が、必要じゃないですか(笑い) 友達でもや、職員の方でも、大丈夫だよって言ってくれる方が、多ければ〔勇気が出る〕」(E氏)

精神障害者であることを理解してもらえる場所で働きたいと考えていたり、少なくとも最初は精神障害者であることを明かして就労したいと考えていることから〈病気を理解してもらえる場所で働きたい〉という意識があることがわかった。

「まあそう、今のところはそう〔オープンで就職しようと〕考えてます。」(D氏)

「病気、あ病気、はこう、わかってくれる所？〔で働きたい〕」(E氏)

#### 【自分が就労する姿が想像できない】

【自分が就労する姿が想像できない】は〈現施設で作業力等をもっと成長させてから就労を目指したい〉、〈就労に対する具体的なイメージが少ない〉、〈今はまだ長時間の労働は無理だと思う〉、〈精神障害者ゆえに就労することが難しいと感じる〉の4つのサブカテゴリーから構成された。

就労経験がない対象者から就労することに進んでいけない意識の一つとして〈就労に対する具体的なイメージが少ない〉が見られた。自身が就労することを具体的にイメージしたことがなく自分にどういった仕事ができるかがわからなかったり、就労することに収入を得ること以外のイメージを持たなかったりすることがわかった。

「〔やってみたい仕事内容は〕…まだ考えてないですねそこまで。ちょっとわかんないですけど(中略) どういう仕事できるかもまだちょっとわかんないんですよ」(D氏)

「まあそ、まあー生活の、ためです。〔お金以外の面で何か変わるかは〕うー……ん、そう、今んとこ考えてないです。」(D氏)

また、〈精神障害者ゆえに就労することが難しいと感じる〉という意識が見られた。精神障害者ゆえに就労することが難しいと感じていたり、就労先の選択肢が少なく一般就職

は叶わない夢だと捉えたりしていることが自身が就労することを考えにくくしていると言える。

「うん。だから一、その、まあ、まあ好きな仕事に就ければ一番いいんですけど一、まあ、そうじゃない仕事でも、もし、そういう仕事に就いたら、まあ一応、できる範囲で、やってみるとか、うん、もっと探してみるとか一、うん、まあ…うーん、まあ仕事はいくらでもあるから、ね、ただ、選択肢がそんなにない、とは思ってたほうがいいかなって」(E氏)

「で俺は一、もう、10年構想なんですよ私の中では。10年構想っていうかもう、まあ長い、時間で一、構想っていう意味で一、構想っていうかなんて言うんですかその計画？っていう意味で10年計画、構想って言ったんですけど一、もう、10年、20年の、計画で、あの一、もうそれぐらい、本当大変なんですよ、あの一、一般の、仕事に、もう一回復帰するっていうのは。」(F氏)

「でも、本当、就職っていうのはちょっと一、なんか、夢みたいな話、希望を通り越して。うん一。夢っていうか、なんていうのこの、希望の、希望っていう意味の夢じゃなくて、もう見えない夢。うん、見えないっていうかなんて言うの、遠くとか、届かない夢って言うのかな？」(F氏)

以上のカテゴリーを踏まえて、本研究における地域で暮らす統合失調症を抱える人の就労に対する意識を(図1)に示した。

【就労することを考える動機に関する意識】を持つことで、【就労することに前向きな意向を持っている】や【就労することに自信がある】といった就労に対する前向きな意識を抱いている。一方で、【就労することに積極的ではない】や【就労を目指す時期が漠然としている】といった就労に対する消極的な意識も抱いており、双方の意識の間には【就労することに自信が持てない】、【自分が就労する姿が想像できない】、【自身の就労に関わる他者への期待】といった意識が存在し、それらが就労に向けて行動に移すことを阻害していた。

#### IV. 考察

##### 1. 就労に向けて行動に移すことを阻害する意識

###### 1) 就労に向けて行動に移すことを阻害する意識が生じる理由

本研究において、【就労することに前向きな意向を持っている】や【就労することに自信がある】といった就労に対する前向きな意識と【就労することに積極的ではない】や【就労を目指す時期が漠然としている】といった就労に対する消極的な意識の間に、【就労することに自信が持てない】、【自分が就労する姿が想像できない】、【自身の就労に関わる他者への期待】といった意識が存在し、就労に向けて行動に移すことを阻害していることが明らかとなった。就労に対する前向きな意識と行動化を阻害する意識の間で葛藤が生じることで行動に移すことに後ろ向きになり、就労に対して消極的になっていると言える。行動に移すことを阻害する意識を持つに至る要因は様々であるが、今回の対象者からは、過去の就労経験の有無が意識を持つまでの過程で大きく影響することが示された。

過去に就労経験がある者では、当時の経験が現在の就労に対する意識に影響を与えていると言える。当時の精神障害を抱えていることを隠して働いていたために心身面の辛さを理解してもらえなかった経験や、思うように仕事ができず周囲から叱られた経験が想起され、将来就労することを考えた際に仕事を遂行していくことに不安を感じ、先へ進むことを躊躇させている。また、当時人間関係に悩んだ経験から、次に就労をする場合は人間関係の良さを重視して選びたいと感じている。就労に向けた支援においても、周囲のより多くの人から応援してもらいたいと考えていたり現行の支援以上に密な支援を求めているいたり人との関わりを強く求めていることが特徴的であった。野坂(2014)によると、統合失調症を抱える人の特徴としてコミュニケーションを取ることが苦手という点が挙げられる。コミュニケーションがうまく取れないことで対人関係に影響が及んでいることで、就労に際しても対人関係で苦労していたと考えられる。

就労経験がない者は、就労に対する知識やイメージの少なさが就労に対する意識に影響を与えていると言える。就労について自身であり考えたことがなく、周囲の人から聞いた話で就労のイメージを作ってしまうがちである。そのイメージを元に抱いた希望に対して、就労を目指すために自分がどのように行動をすれば良いか具体的なステップがわからず、先に進むことができない。先に進むことができないことで就労することそのものができるか不安に感じ、自信に繋がらないと考えられる。

## 2) 周囲の人から受ける影響

就労に対する前向きな意識を阻害する意識に至る要因の一つとして、周囲の人の影響が挙げられる。

本研究の対象者は、周囲の人の意見に影響されやすいという点が共通して見られた。就労に対して前向きな意識を述べるが、実はそれは両親や施設スタッフに言われたことがそのまま自身の意識としてとして置き換えられたものであり、自身の意見については、よくわからない、あまり考えていない、等といった返答が目立った。自分の考えではなく他者からの助言をそのまま自分の意識と捉えてしまうことから意識の具体性が欠けてしまい、就労に対する前向きな意識よりも自信を持つことができない等の消極的な意識が勝ってしまっていると言える。前述の就労経験のない者が就労に対するイメージが湧きにくい傾向にあることも、就労の経験がない分さらに周囲の人の意見が就労について理解する最大の情報となるため、自分の意見として置き換えられ、就労に向けた意識に作用していると言える。中村ら(1991)は、対象者の「働きたい」という声は他人からの圧力や批判の反映によるものであったり、強迫的に考えていたり、働くことの価値を肥大化、絶対化している可能性があるため、ケア提供者は安直に働くことを進めたり要望を引き受けたりすることに慎重でなければならない、と述べており、「働きたい」という声が本当に本人の思いであるのか注意を向ける必要があるだろう。

また、今回保護者から何らかの生活援助を受ける人を対象としたこともあり、両親の発言が意識に影響している様子が目立った。全対象者の両親が共通して対象者は無理に働かなくて良いと思っているが、その思いに至る経緯は対象者の就労経験の有無によって異なると言える。就労経験がある対象者の両親は、対象者が過去に就労して苦労を経験する様

子を見ていたため、また失敗して症状悪化するくらいなら無理に働かなくても良いと思っている、と対象者は発言しており、就労経験がない対象者の両親は対象者が就労をしたことがなく生活に支障がないため無理に働く必要はないと思っている、と対象者が発言している。統合失調症は青年期が好発年齢の疾患であり、本研究の対象者もほとんどが若年で発症している。発症後も親元で生活していることから、対象者と両親双方にとっても対象者が就労をしない状況は当たり前の生活状況となっている可能性がある。就労したいという気持ちがあっても、両親から無理に働かなくて良いと言われることで就労に向いていた意識を弱めているのであろう。

## 2. 自身の生活に対する焦りのなさ

自身の生活に対する危機感の少なさが就労に対する意識に影響を与えていると言える。

現在は保護者から援助を受けて生活をしているため保護者がいなくなった場合のことを気にしており、それが就労に対する意識として表れている。しかし、一方で今はまだ生活に困っていないことや両親が健在であること等を理由に、考えることを先延ばしにする発言も多く見られる。自身のこの先の生活について考えなければならないという気持ちは少なからず持っているが、それよりも現在の生活を優先しがちであり、結果として就労することを先延ばしにしている。

将来の生活について述べられる内容に関しても、現実検討能力が低いと考えられる部分が散見された。現在の作業所の工賃等を貯金すれば両親が亡くなった後も生活には困らないと考えていたり、両親が残す遺産があれば生活には困らないと考えている対象者もいた。また、将来必要となる生活費等の知識が足りない状態で考え、問題がないと捉えている対象者も多かった。現在の考え方のまま働くタイミングを先延ばしにした場合、実際に自力で生活をする状況に直面した際に自分が考えてきた計画と実際がかけ離れてしまい、対象者たちにとって不本意な生活を送らざるを得ない可能性も考えられる。

## 3. 就労移行促進に向けた効果的な支援への示唆

本研究では、【就労することに自信が持てない】、【自分が就労する姿が想像できない】、【自身の就労に関わる他者への期待】の3つの意識が就労移行促進を阻害する意識となっていることが明らかとなった。この3つの意識に対するケアを行い意識を弱めていくことが、地域で統合失調症を抱える人たちが就労に向けて行動に移すことに繋がっていくと言える。

関口(1973)は、就労の意義について「精神障害者の Rehabilitation（職業的更正）は、単に、職業的能力を回復するだけでなく、失われた自尊心や自信を取戻し、劣等感や敗北感から脱して、積極的に環境に適応してゆくことができるような精神的能力を獲得してゆくことを意味している。」と述べている。精神疾患を抱えながら地域で生活する人に対して、就労は金銭だけでなく社会的・精神的能力を獲得していく為にも有効であるという理解を促していくことが、就労を後押しする要因となりうる。その際、ケア提供者は対象者自身が自分の人生プランをどのように考えているのかを共有し、適宜必要な情報・支援の提供を行っていくことも重要であり、対象者自身もプランについて語り、ケア提供者から



得た知識を生かすことで、プランの中で就労をどのように位置付けていくかを考え、決めることで自身が就労する姿を想像しやすくなり、自己効力感も高まり、就労に向けて行動に移しやすくなるのではないだろうか。

また、対象者の両親が抱えている対象者の就労に関する想いが、対象者の就労に対する意識に影響を与えていることも明らかとなった。対象者と共に暮らす両親は、精神症状が落ち着いている状態を維持して欲しいという思いから、就労により症状が悪化するくらいなら無理に働かなくて欲しいという思いを抱く傾向にある。障害者の地域支援に関して、大浦(2016)、ベッカー、ドレイク(2004)、伊藤(2012)によると、アメリカで開発された生活支援プログラムの ACT(Assertive Community Treatment：包括型地域生活支援プログラム)や就労支援プログラムの IPS(Individual Placement and Support：個別職業紹介とサポート)においては、どれだけ重い障害があったとしても、障害者本人が望み、かつ可能な支援であれば何でも支援を行う、という理念を大切にしている。対象者の就労したいという思いを何よりも大切にしており、対象者の状況に合わせてタイムリーな支援を行うことで就労につながる可能性を見出している。しかし、このような支援体制と対象者の両親が抱く想いは噛み合っておらず、支援が両親のニーズとは合わなくなってしまう。ACT や IPS の支援には、家族支援も含まれる。家族の不安を軽減することも非常に重要であり、対象者と家族を繋ぐ役割を看護師が担うことは非常に大きな意味があると言える。両親の不安を軽減させることで、両親は対象者の身近なサポーター役となる可能性があり、そのことが対象者をより就労に向けて行動に移す意識につながっていくのではないだろうか。

## V. 結論

本研究は、地域で両親と共に生活をしている青年期から壮年期の統合失調症を抱える人の就労に対する意識を質的記述的に分析することによって、地域で生活をしている青年期から壮年期の統合失調症を抱える人に対する支援のあり方を検討することを目的として行った。本研究の結果より、地域で生活する統合失調症を抱える人が就労に向けて行動に移すことを促すためには、就労自体が精神症状の緩和の一助になることを伝えつつ、自身の人生プランをケア提供者とともに考えながら就労の位置付けを行うことが対象者に就労に向けて前向きな意識を持たせることに繋がると考えられる。また、さらに両親に対しても、対象者が就労することの不安を取り除く支援を行い、両親を対象者の味方にとことにより就労に向けて行動に移すことを促すことが可能となるだろう。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました施設の施設長及びメンバーの皆様へ心より感謝申し上げます。また、本研究のご指導をしてくださった首都大学東京大学院の廣川聖子准教授へ心より感謝申し上げます。

## 文献

- Deborah R. Becker, Robert E. Drake. (2003)／堀宏隆(2004). 精神障害をもつ人たちのワーキングライフ—IPS：チームアプローチに基づく援助付き雇用ガイド—(3刷)(大島 巖, 松為信雄, 伊藤順一郎. 監訳). 金剛出版, 東京
- 端田篤人(2005). 精神障害者に対する就労支援のあり方に関する一考察. 長野大学紀要, 27 (3), 51-58.
- 早野禎二(2005). 精神障害者における就労の意義と就労支援の課題. 東海学園大学研究紀要, 10, 29-43.
- 堀弘子, 石井睦子, 平岩一馬, 安井正(2014). リワークにおける卒業プレゼンテーションプログラム導入の効果～セルフ・エフィカシーの観点から～. 病院・地域精神医学, 56,20-23
- 粥川裕平(1988). 精神障害者とくに分裂病者が働くことの治療的意義について. ゆうゆう, 4, 53-59.
- 厚生労働省(2013). 障害者雇用実態調査結果. <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11704000-Shokugyouanteikyokukoureishougaikoyoutaisakubu-shougaishakoyoutaisakuka/gaiyou.pdf>
- 厚生労働省(2015). 障害者の就労支援対策の状況.  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaishahukushi/service/shurou.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/shurou.html)
- 名古屋市健康福祉局(2003). 精神保健福祉基礎調査
- 内閣府(2011). 平成 23 年度障害者白書.  
<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h23hakusho/zenbun/honbun/index.html>
- 中村正利, 窪田彰, 小田敏雄, 大井徹, 柳牧子, 上野京子, 水田博子, 宮崎ゆき, 関百合(1991). 地域活動を通し見えてきたもの—働くことと、言葉の問題—. 病院・地域精神医学, 34 (1), 24-27.
- 野坂達志(2014). 統合失調症とのつきあい方—対人援助職の仕事術—. 金剛出版, 東京
- 大浦 (樺島) 沙織(2016). 生活支援と就労支援の連携—ACT-J の実践を通して—. 精神障害とリハビリテーション, 20,184-191.
- 尾崎幸恵, 伊藤真人, 中川正俊, 星野勝(1996). 精神障害者のさまざまな就労定着援助の症例研究—「保護就労」の試みから—. 職業リハビリテーション, 9, 22-29.
- 関口吉弘(1973). 精神分裂病の薬物寛解者の職業的更正のために. 精神医学ソーシャル・ワーク, 8(1), 16.
- 谷口清弥(2015). 精神科クリニックに通院するメンタルヘルス不調者のセルフマネジメントの現状と支援ニーズ. メンタルヘルスの社会学, 21, 45-52.
- 東京都福祉保健局(2013). 東京都福祉保健基礎調査.  
[http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kiban/chosa\\_tokei/zenbun/](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kiban/chosa_tokei/zenbun/)
- 山根俊恵, 中川俊彦, 草地仁史, 磯村聰子, 赤瀬洋介(2014). 精神障がい者の就労支援に関する研究—就労継続支援 B 型から一般就労を目指す利用者支援のあり方—. 第 21 回日本精神科看護学術集会, 219-223.



## 資料

(表 1) フェイスシート

質問 1	性別 ( 男 女 )
質問 2	年齢 ( 歳代)
質問 3	統合失調症診断年齢 ( 歳代)
質問 4	現在は誰と暮らしているか ( 自由記載 )
質問 5	今までに就労経験はあるか ( ある ない )
質問 6	〔質問 5 で「ある」〕の場合、働いていた年数・時期 ( 自由記載 )

(表 2) インタビューガイド

* 「自分が働くことについて、あなたはどのように考えていますか。」
① (いずれ) 働きたいという思いはありますか。それはどうしてでしょうか。
② 「働く」ということに関して、不安に感じることはありますか。 → あるとすれば、不安に感じる具体的な内容を聞かせてもらえますか。
③ 一緒に暮らすご家族からは、あなたが働くことに関して何か言葉をもらったことはありますか。 → あるとすれば、どのようなことを言われましたか。また、それを聞いて、あなたはどのように感じましたか。 → ないとすれば、ご自身ではご家族はどのように考えていると思いますか。
④ ご自身の今後の生活について、どのように考えていますか。

(表 3) 対象者概要

対象者	年齢	性別	統合失調症診断年齢	通所施設	就労経験
A	40 歳代	男性	30 歳代前半	地域活動支援センター	有り
B	20 歳代	女性	10 歳代前半	地域活動支援センター	無し
C	30 歳代	男性	20 歳代後半	地域活動支援センター	有り
D	30 歳代	男性	10 歳代	就労継続支援 B 型事業施設	無し
E	50 歳代	男性	10 歳代前半	就労継続支援 B 型事業施設	有り
F	30 歳代	男性	20 歳代前半	生活訓練施設	有り

(表4) 「就労に対する意識」に関するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
【就労することを考える動機に関する意識】	〈生活保護を受けたくないから就労を目指す〉	D-2 生活保護に頼らず実費や生活費は自分で稼ぎたい D-13 生活保護を受けることが決まったことで働くことへの意識を持ち始めた E-7 生活保護は受けたくないから就労を目指す
	〈両親が健在のうちに就労をしたい〉	E-4 両親が健在のうちに就労をしたい E-19 就労をする時期は決まっていなくても両親の年齢は気にかかっている F-15 将来は両親の遺族と自身のアルバイト代で生活するつもりでいる F-17 両親が亡くなった後の将来については色々な状況の可能性を考えて
	〈周囲の人に影響されたことで就労に関心を持っている〉	A-10 将来的な目標は精神的にも経済的にも自立すること E-19 両親に言われたから就労をしてみたいと思う E-25 施設から就労をしていった人たちに憧れを感じる E-29 施設のスタッフから勧められて清掃の仕事と施設の掛け持ちに興味がある
	〈働くことは好き〉	E-10 働くことは好き
【就労することに前向きな意向を持っている】	〈自分ができると思うタイミングで就労をしたい〉	B-3 成人なので社会に出て働いてみたい C-1 身体が良ければ働こうと思わなかったが数年前からは働こうと思って D-1 働きたいと思っている E-1 そろそろ就労を始めてみたい
	〈生活する上で働くことは大切である〉	F-4 仕事をするに前向きである C-8 生活する上で働くことは大切である D-6 就労に向けて就労移行支援に行きたい
	〈就労することについて目標や希望がある〉	E-2 A型で働きたいと思っている E-3 清掃や軽作業の仕事がしたい E-5 一般の職場やA型に就労することが今後の生活プラン F-1 以前働いていた時のように再び働くことが目標 F-8 ようやく仕事に向けて動き出しているから生き生きしている F-10 両親が健在のうちに両親が商業をしている店で働くことも考えている F-13 アルバイトは経験が多いから目指すことができそうな目標 F-14 アルバイトから社員登用につながるような就労が出来たら良いと思って
	〈元気なうちは働かなければならない〉	E-9 自分が元気なうちは働かなければならない
	〈働かない時期に考えた思いを抱き続けている〉	F-18 働いていない時に抱いた働き方についての考えは今も変わらない C-13 働くことでの喜びを得たい E-11 自分のためになるから働く E-12 自分の趣味のためにも頑張りたい
	〈自分のためになるから働きたい〉	E-29 就労して自分で稼いだ上で趣味もやれるようになることも目標として考えている
	〈現在は就労することを焦っていない〉	A-1 働くことよりもまずは精神的な自立が先 A-7 働く事を焦りたくはない C-7 就労することだけに捉われず自分らしく生きることが大事 C-11 生活に困っておらず働くことを焦っていない E-16 就労を始めることを焦ってはいない E-17 両親がまだ健在だから働くことを焦っていない F-3 今は再就職することを焦ってはいない A-3 将来的には障害者雇用を目指したい E-18 働く機会があれば働いても良いかなと思う C-10 何もせず暇を持て余すことは不安 F-7 もっと早く仕事に向けて動き出したかった
	〈もし機会があれば働いてみてみたいかなと思う〉	C-12 将来働く気持ちもある
	〈就労に向けて何も動かないことは不安〉	F-5 仕事に関する次の段階にはまだ進まないが仕事をすることから逃げていくわけではない C-5 期限内に就職先を決めたくないから就労移行支援を受けることに抵抗 D-7 就労移行支援に行っても就労するまではまだしばらく時間がかかる D-14 就労移行支援に入る時期ははっきり決めていない E-14 数年内に就職先を見つけたらいいかなと思う E-19 就労をする時期は決まっていなくても両親の年齢は気にかかっている E-20 就労は近いうちを想定しているが時期は漠然としている
	〈今はまだ行動に移していないが働く気はある〉	A-2 現在は働くことよりも現在の施設での生活のままで良い A-5 現在の施設への参加日数や時間は現状維持が良い B-1 施設のパラソールは楽しそうだから参加意欲があり就労は意識している B-5 将来働くための準備をすることはあまり考えていない B-7 今はまだ働くことに対して積極的ではない C-6 自分の就労に対する気持ちは他の就労移行支援のメンバーより強い E-8 自身の生活状況によっては生活保護を受けても仕方ないと思ってい
	〈就労を目指す時期は漠然としている〉	A-4 働けるかどうか自信がなく半分諦めている C-3 仕事自体は出来るが他者から守られた場であれば働くことに自信が持てない D-9 働くことができるか、長続きするかが不安 A-8 就労する事を考えた時に与えられた仕事をちゃんとできるかどうか不安 E-22 仕事に自分に向かない不安 B-6 まだ仕事の責任を取る自信がないから行動に移していない E-27 勇気が出ないから就労に向けて先に進めない A-9 働くことで病気が再発しないか不安
【就労することに積極的ではない】	〈現在は就労に向けて活動する気はない〉	D-10 体力はあるから就労する上で体力面は問題ないと思っている E-24 精神症状は悪化することなく働けると思っている F-11 働くことや自身の生活に不安はない C-2 就労移行支援で実際に働いてみたら仕事はできると思った F-9 現施設で作業をしてみれば仕事はできると思った C-4 働く上で人と関わるのが精神的に楽 E-6 実家の家族は人間関係などが厳しくあまり働きたくない E-21 働く上では人間関係が大事
	〈就労することに積極的ではない〉	C-9 現行の支援を受ける前より低いハードルの支援を受ける機会が欲しい E-28 勇気を出して就労に挑戦するには多くの人の応援が必要 D-4 最初は精神障害を抱えていることを明かした上で働く E-23 病気を理解してくれる場所が働きたい A-6 現在の施設での作業などをもう少しできるようにならなければならない F-6 現施設で学べることも多いからと思っている B-2 仕事には責任があるから大変そう B-4 自分が就労する事について具体的にイメージをしたことがない D-3 働くことのイメージは適度目通り D-8 働くことによる金銭面以外の変化については考えていない D-11 自分はどういう仕事ができるかはまだわからない D-5 働く時間は1日短時間から始めて仕事に慣れたら延ばす予定でいる D-12 長時間の労働は今は無理だと思っている E-15 自分が選べる仕事の選択肢は少ないと思っている F-2 精神障害者として再び働くことは難しいことだと捉えている F-12 就職をすることは叶わない夢だと思っている
	〈生活状況によっては就労ではなく生活保護受給も一つの方法だと思う〉	
【就労することに自信が持てない】	〈就労することに自信が持てず先に進めない〉	
	〈就労による心身面への影響に不安がある〉	
【就労することに自信がある】	〈就労による心身面への影響はないと思っている〉	
	〈働くことや自分の生活に不安はない〉	
	〈施設の作業で仕事はできると感じている〉	
【自身の就労に関わる他者への期待】	〈就労する上では人間関係が大事〉	
	〈周囲の支援次第では就労に挑戦できると思う〉	
	〈病気を理解してもらえ場所が働きたい〉	
	〈現施設で作業力等をもっと成長させてから就労を目指したい〉	
【自分が就労する姿が想像できない】	〈就労に対する具体的なイメージが少ない〉	
	〈今はまだ長時間の労働は無理だと思う〉	
	〈精神障害者ゆえに就労することが難しいと感じる〉	

